

地域研究コースから地域政策学部へ

地域政策学部教授 阿部 聖



早いもので愛知大学に赴任して11年目になる。経済学部の日経経済史担当として採用されて10年間お世話になり、今年の四月からは、新しく生まれた地域政策学部の一員となった。

以下、図書館とのかかわりで経済学部の10年と移籍ついてふり返ってみたい。

経済学部では地域研究コースに所属した。当初は、なぜ地域研究コースかという思いもあった。赴任直後わかったことだが、2年後には新しいカリキュラムが実施されることに決まり、私は近現代日本経済史の他に地域経済史という科目を担当することになっていた。地域経済や産業の歴史についての科目の担当をも期待しての募集だったのだろう。

それまでの私の主要な研究テーマは、日本の石油産業発達史で、とくに輸入原油精製や石油資源開発の展開過程、それと関連した石油政策に関するものだった。また、13年間在籍した前任校が浜松市にあったこともあり、かつて同地域の三大産業といわれた繊維(染織)、楽器(ピアノ)、機械(織機・自動車)などの産業史を研究テーマの一つに加えていた。

そうはいっても、地域研究コースの所属教員として地域経済史や専門演習を担当するということはかなり工夫や準備が必要と考えられた。隣接しているとはいえ、東海ないし三河地域についてはほとんど何も知らないのと同然であった。地域経済史の内容をどうするか、専門演習の内容を地域とどう結び付けるかは、私にとって大きな問題だった。ただ、学部の配慮で専門演習も赴任後3年目から担当することにしていただいたので、そ

の期間を授業準備のために利用することができた。

当然のことながら図書館に、そして中部地方産業研究所(以下、中産研)、総合郷土研究所(以下、郷土研)の図書室に通い、地域経済、地域産業関係の文献・資料を読みあさった。図書館では基礎資料や統計の存在について確認した。中産研、郷土研には先輩諸先生方が残してくれた地域経済・産業に関する文献・調査報告・資料、社史等がたくさんあってイメージを膨らませるのに役立った。

とくに玉城肇先生の三河ないし東海地域の産業に関する一連の業績は刺激となり、また一つの目標ともなった。恥ずかしながら、先生についての私の知識は、財閥研究者、M.ペリー「日本遠征記」の翻訳者(土屋喬雄氏との共訳)といった程度に過ぎなかった。先生が本学の学長を務めた人だということ、そしてもともとは家族制度史や女性史をテーマとし、それ以外にも教育史や芸術論など数多くの業績や翻訳を残していたことを、この時はじめて知った。

ちなみに、先生の地域産業に関する業績には『三河地方における産業発達史概説』(中産研、昭和30年)、『明治中期における愛知県の産業』(中産研、昭和41年)、『豊橋地方における特殊産業の由来』(中産研、昭和49年)や松坂屋の伊藤家や神野家についての研究成果であり、遺作となった『地方財閥と同族結合』(御茶ノ水書房、昭和56年)などがある。

他方で、図書館の地域産業に関する基礎資料、例えば『明治前期産業発達史資料』、『府県統計書(愛知県統計書など)』『営業報告書集成』やそれらの資料を利用した研究論文などに目を通しながら気づいたこともいくつかあった。例えば、石井寛治氏が『帝国統計年鑑』『農商務統計表』等から作成した地域別鉱工業賃金労働者数によれば、日本の産業革命がスタートしたといわれる明治19年には、東山地域(長野、岐阜、山梨)に21,513人という近畿や南関東を上回る日本で最も多い賃金労働者が集中していた。同年の東海地域(愛知、三重、静岡)の賃金労働者数は、東山地域の4分の1程度に過ぎなかった。東海地域が近畿、北九州、南関東とともに四大工業地域を形成

し、それにふさわしい労働者数を擁するようになるのは、その後の産業化の進展に負うところが大きかった。

また、山口和雄氏の作成による「明治七年府県物産表」(全国平均)によれば、総生産額の農工別割合は農産物61.0%、工産物30.0%、その他9.0%である。農産物に占める米の割合は62.8%、工産物に占める醸造物類(酒類、醤油、味噌)が27.8%、織物類が16.6%となっている。同表の原資料を利用して愛知県だけを見ると、総生産額の割合は、農産物62.4%、工産物32.2%、原始生産物5.4%である。ただし、米の割合は55.5%と低く、棉類が12.7%で全国平均を大きく上回っている。そして工産物の内訳は醸造物類が46.8%、織物類16.9%、綿糸類3.1%などとなっている。

この事実は、愛知県では、主要農産物である米、麦、棉類などが、そのまま消費されたり移出されたりするのではなく、不足分はよそから移入して酒、醤油、味噌、そして綿糸や綿織物などの工産物に加工されていたことを示す。その意味では、のちの産業化の基盤がかなりの程度まで形成されていたと考えることができる。

こうした準備過程を経て、地域経済史や専門演習の内容をどうするかについての私なりの結論を出した。地域経済史については、できるだけ一つの地域を総体的に検討することが重要だと考えるようになっていた。その結果、愛知県を中心とする東海地域の産業発展史を、紡績産業だけでなく製糸業、醸造業、染織業、機械産業、食品産業、陶磁器産業といった諸産業を取り上げるとともに、鉄道、電力、通信といったインフラの発展過程を盛り込むことにした。というのは、地域経済史とか地域産業史といった研究書やテキストも散見されるようになっていたが、内容的には日本各地の代表的な産業研究の寄せ集めといったものが多かったからでもある。

対象とする時期は、明治初期から愛知県で自動車産業が産声をあげる昭和初期までとした。これにより愛知県がいわゆる"モノづくりのメッカ"というようにいい方をされる製造業優位の地位を確立するにいたった経緯の一端を学生たちに伝えることができる

と考えた。

また、専門演習については、とくに戦後日本経済発展史を勉強しながら、それを地域経済や産業の発展や衰退とどう関連してきたかについての勉強に重点を置くことにした。そのためにはやはり夏休み等を利用した工場見学や施設見学というかたちで大学の外へ出て、地域産業の歴史や現状を知ることが重要だと考えた。

地域研究を大学生活の柱の一つに位置付けて以後、これまで心がけたことが三つあった。一つ目は、地域研究のための基礎資料を収集すること。この点では『営業報告書集成』の第5集(東京大学所蔵分)以降を春の共通費を利用して図書館に入れてもらうことにした。同資料には大企業だけでなく地方企業・銀行・鉄道等の営業報告書が収められている。来年度には第5集分の購入が終わる。

二つ目は、中産研を研究活動の拠点の一つとして位置付けること。これまで中産研の研究プロジェクトに参加して、地域経済や産業についての共同研究を進めてきた。とくに中部地域企業の海外進出についての現地調査

には力を入れている。また、公的機関や民間研究機関が刊行する報告書や地域企業の社史の収集に努めている。

三つ目は、専門演習の夏合宿(2泊3日)で地域の工場や施設見学を毎年実施すること。専門演習を担当した2003年からテーマを決めて工場・施設見学を実施し、見学先もすでに50カ所を越えた。報告書等の作成は、学生の図書館利用にも少なからず役立っていると思う。

一昨年、経済学部の人間環境コースと地域研究コースの教員が移籍する新学部、すなわち地域政策学部設置構想がもちあがった。経済学部に残るか、新学部に移籍するかについてはそれほど悩まなかった、と言えようそのになるが。移籍を決めたのは、地域政策学部がこれまで経済学部地域研究コースでやってきたことの延長線上にあるような気がしたこと大きい。ただ、これまで以上に地域経済(産業)史や専門演習の内容を充実させていく必要があるだろう。それに比例して図書館との付き合いの度合いも増していくと思われる。よろしく願いするしだいである。